

所属： 危機管理学部 危機管理学科
資格： 教授
氏名： 秦 康範

研究課題名	火山噴火災害における地域住民や登山者・観光客のハザード理解とリスク認識に関する研究
研究目的及び研究概要	火山現象の解明のための研究、噴火予測のための研究、災害誘因予測のための研究の知見を踏まえて、火山噴火ハザードマップが作成され、自治体を通して地域住民に防災マップとして配付されている。ハザードマップは、現状の防災対策における起点として位置づけられており、ハザードマップがどのように理解されているのかは、住民避難や登山者・観光客へのリスク周知を検討する上で極めて重要である。しかしながら、地域住民や登山者・観光客のハザードマップの理解度は必ずしも明らかにされていない。 そこで本研究では、観光地化された火口を有する火山を対象に地域住民や登山者・観光客のハザード理解とリスク認識を明らかにすることを目的とする。
研究実績の概要 研究の進捗状況・得られた成果・今後の課題・研究実績等	研究の進捗状況 活火山である焼岳に対して、2024年6月7日22:10に、気象庁は火山の状況に関する解説情報（臨時）を発表した。この臨時情報は、7月16日16:00まで継続した。臨時情報が一ヶ月以上継続したことは過去になく、異例の状況であった。そこで、10月13日から15日にかけて現地調査を実施した。具体的には、上高地インフィメーションセンター、西穂山荘、上高地町会長の小林清二氏（中の湯温泉旅館経営者）にヒアリングを実施した。また、焼岳への調査登山を行うとともに、長野県松本地域振興局ならびに松本市危機管理課へヒアリング及び意見交換を実施した。 また、富士山噴火に伴う溶岩流からの徒歩避難については、2023年度から継続して研究を行っており、審査論文としてとりまとめた。 得られた成果 一連の調査の結果明らかとなったことを以下に挙げる。 ・解説情報（臨時）を受けて、松本市、高山市、長野県、岐阜県をはじめ、協議会の関係機関は直ちに対応を実施した。特にコアメンバー間で普段から顔の見える関係を構築していることが迅速な対応に有効だったことが明らかとなった。 ・上高地観光への影響は極めて限定的であった。 ・松本市や高山市は、登山道の入口に登山を控えるように呼びかける看板を設置したにもかかわらず、看板を認識した上で、登山する登山者が一定数存在することが明らかとなった。この理由としては、焼岳は日本100名山の1つであり、噴火警戒レベルが2に上昇すると焼岳は入山規制されることから、臨時情報の間に登山をした方が良いという判断を持った可能性が示唆された。 ・登山者への注意喚起のあり方が課題として挙げられた。 ・インタビュー結果を踏まえ、登山者向けの質問紙のプロトタイプを設計した。 今後の課題 焼岳で発表された解説情報（臨時）と協議会の各機関の対応調査をとりまとめて、学会で発表する予定である。また、活火山を対象に、登山者（観光客）を対象とした質問紙調査を行う必要がある。 研究実績等 佐藤史弥，孫鵬飛，秦康範：富士山噴火に伴う溶岩流からの徒歩避難に関する基礎的検討 自然災害科学，43(S11)，113-126，2024年12月